

国境の海、係争の島：ダイビングの楽園・シパダン島(北ボルネオ)をめぐる近代の軋轢

清水, 展
九州大学比較社会文化研究院

<https://doi.org/10.15017/8671>

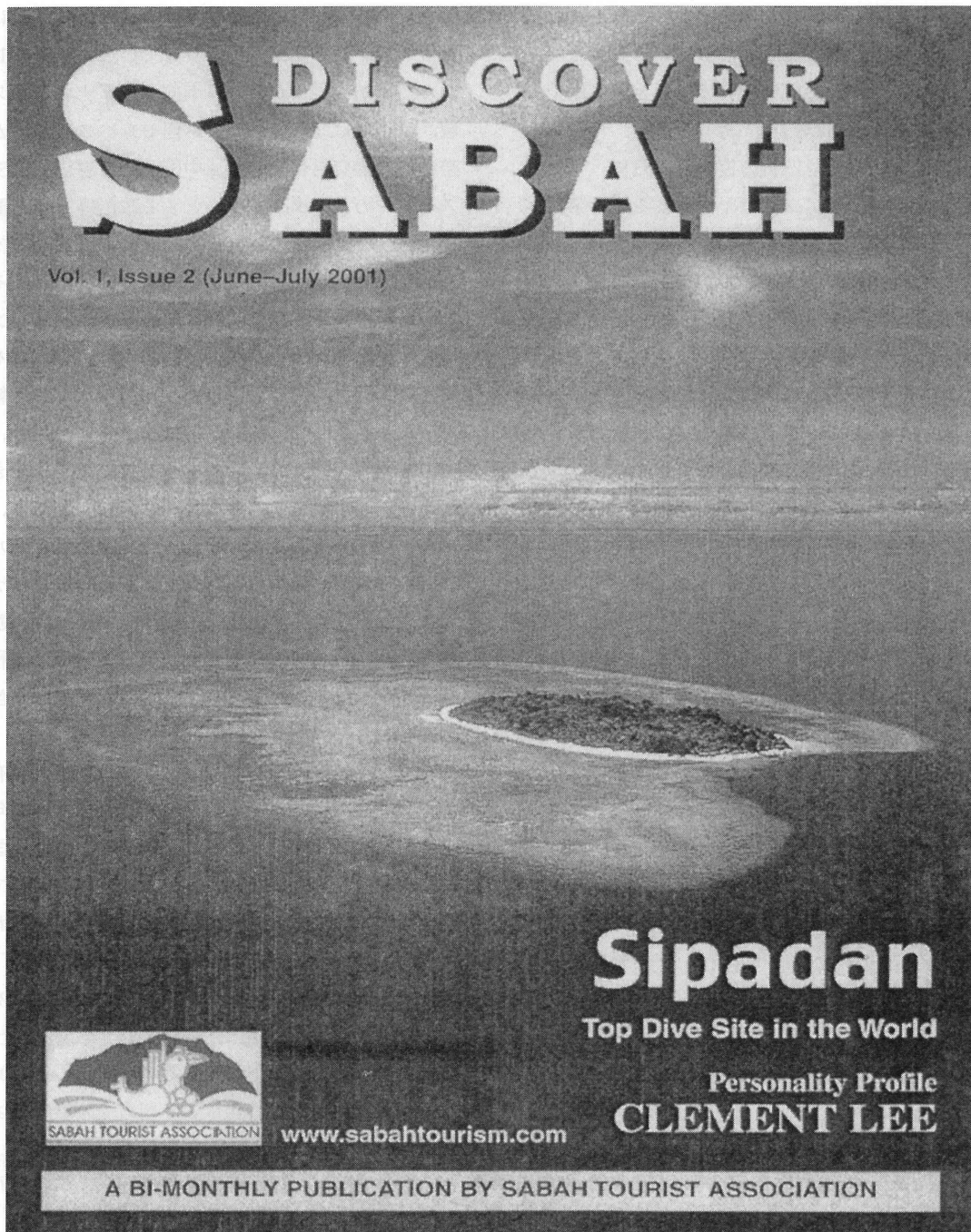
出版情報：比較社会文化. 11, pp.99-110, 2005-02-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

国境の海、係争の島

ダイビングの楽園・シパダン島(北ボルネオ)をめぐる近代の軋轢

清水 展

キーワード：誘拐事件、領有問題、国際司法裁判所、世界遺産、東マレーシア、サバ州、
アブ・サヤフ、フィリピン・ムスリム



シパダン島を表紙にした、サバ州観光局の宣伝雑誌

1. はじめに

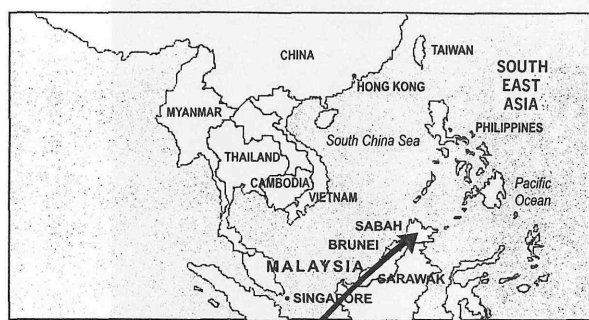
シパダン島は、ボルネオ北東部、マレーシアとインドネシアの国境線を海上に延ばした先に浮かぶ小さな島である。干潮時には30分もあれば、浜辺にそって島を歩いて一周することができる。波打ち際の狭い砂浜部分を除けば、島のほとんどは密生した樹木に覆われている。1980年代後半から、マレーシア側の資本によってダイビング・リゾートとして開発が進められ、現在では世界有数のダイビング・スポットとなっている。島を取り巻くサンゴ礁の先が数百メートルの深さのドロップ・オフ（垂直の壁）となっており、回遊性の大型魚を見ることができるのが最大の魅力である。同時にそこは、渡り鳥の休憩地であり、また島を取り囲む砂浜は海亀の産卵場所となっている。美しい自然のゆえに、それをめぐって観光開発の攻勢と環境保全の努力とがせめぎ合っている(Wong 1991)。

また同島では、2000年4月23日の復活祭の日に、フィリピンの反政府ゲリラ組織のアブ・サヤフによる誘拐事件が生じ、21人の人質のなかに10人のヨーロッパ人ダイバーが含まれていたため世界中のメディアの関心を集めた。誘拐犯らは、2隻の高速ボートでフィリピン領海へ逃げこみ、そのまま20時間ほどをかけてホロ島まで直行して山中の隠れ家に潜伏した。人質の解放によって一応の解決を見るまでの数ヶ月間、マレーシア、フィリピン、フランス、ドイツなどの新聞は、連日のように加熱した報道を続けた。その事件は、フィリピンのエストラダ大統領の下での軍事

掃討作戦によって追い詰められた、イスラム過激派・独立運動のグループが活動資金の獲得を狙って引き起こしたものであり、人質の解放と引き換えに少なくとも1,000万ドルの身代金を獲得したと言われている。それは、国境による海の分断と、国境警備の限界や盲点をついた巧妙な作戦であったが、そもそも、キリスト教徒が国民の90%を占めているフィリピンの政府が、国境の内側に囲い込んだスルー諸島、ホロ島、ミンダナオ島に住むイスラム教徒を、異教徒として差別しつつ同時にフィリピン国民として支配して行く過程において生じた矛盾が生み出したものであった。

そもそも20世紀に入ってフィリピンがアメリカの植民支配を受ける以前、南部ミンダナオ以南の地域には宗主国であるスペインの実効支配が及んでいなかった。18世紀後半から19世紀後半にかけて、南部ミンダナオからスルー海域、さらには北ボルネオから西セレベス海域にかけての一带は、奴隷交易にもとづく中国との貿易経済に支えられ、スルーのスルタンを中心とする政治経済統合圏を形成していた。そうした統合圏をワレンは「海洋交易政体」(“Maritime State”)と名付けている(Warren 1985)。そのまとまりを分断分割する形で、20世紀の前半に、オランダ、イギリス、アメリカが、国境線の確定確保によってそれぞれの植民地版図を明確に決定しようと試みた。20世紀の後半にはそれを継承して、インドネシア、マレーシア、フィリピンの3国が、領土支配をめぐって確執を続けてきた地域のひとつが北ボルネオ(サバ州)である。¹しかし、実際には現在に至るまで、シパダン島を始めとするスルー海およびセレベス海の島々や、ボルネオ北部やミンダナオ南部の沿岸部は、地域住民・海域漁民らが名目的な国境を越えて、旅券や査証なしに、自由に行き来しあい、人の移動と交易ネットワークによって密接に結びつけられてきた(床呂1999)。

そうした状況のなかでシパダン島は、その領有をめぐってマレーシアとインドネシアのあいだで、1969年以来、断続的な話し合いがもたれていた。1996年には両国が国際司法裁判所に裁定をゆだねることに合意したことで、国境線の確定が具体的に争われ、国家の外縁が決定される象徴的な場所となったのである。判決は2002年12月に下され、結果は、17人の判事16対1でマレーシアの領有を認めるものであった。この裁判は、東南アジアの隣国同士がその国境問題をめぐって、国際司法裁判所に頼った初めての、またアジア全体でも過去40年間で初めての事例であり、両国



サバ州(左図)と
周辺海域(上図)

1 1963年に、イギリス植民地であった北ボルネオ(サバ)とサラワクが、マレーシア連邦に加盟したとき、それに反対して「対決政策(コンフロンタシ)」を採るインドネシアとのあいだで小規模の武力衝突が起きており、連邦の発足当初の両国の関係は必ずしも良好ではなかった。またフィリピンも、かつて北ボルネオがスルーのスルタンの属領であったことから、スルーを版図とするフィリピンがその属領も合わせて継承しているとして、1962年にサバ領有権を主張し、現在に至るまで取り下げていない。サバの連邦加入後、マレーシアはインドネシア、フィリピンの両国と2年間ほど国交を断絶した。

間の「関係の成熟」を示すものであった。同裁判所の裁定による平和的な解決は、マレーシアとシンガポール間でのペドラ・ブランカ島の領有をめぐる問題や、南シナ海にかぶ南沙諸島および西沙諸島の領有をめぐる多国間にまたがる問題をはじめ、² 東南アジア諸国間の他の国境問題の平和的な解決法を示唆するもので、きわめて意義深い(Pereira, Brendan in The Straits Times 2000/12/18)。さらには東南アジアに限らず、日本にとっても、北方領土と竹島と尖閣列島の領有をめぐる、それぞれロシアと韓国と中国とのあいだで係争中であり、各国がナショナリズムの高揚と結びつけて問題化する可能性がきわめて高いゆえに、参考とするに価する事例である。³

誘拐事件にしても、領有問題にしても、近代国家とは、国境を確定し、その内部の空間を固有の領土として排他的な主権を行使することが可能になって初めて、存立基盤を有するという機制と密接に結びついている(石川2004: 67-69)。本稿は、北ボルネオの海に浮かぶ小さな島シパダンをめぐる近年の出来事を取り上げ、そこに集約して現れる東南アジア近現代史における宗教・民族・国家間の軋轢の具体的な表れを、国境の問題と結び付けて素描しようとするものである。

2. 紺青の海、翡翠の島

シパダン島は、北ボルネオの東海上、マレーシアとインドネシアを分かち海の国境線上の付近(北緯4度7分、東経118度38分)に浮かぶセレベス海の小島である。マレーシア領の陸地の最も近い場所であるサバ州タンジュン・トゥトップ(Tanjung Tutop)から14海里、インドネシア領セバティック島の南端から約40海里の距離にある。その面積は0.03平方キロであり、ほぼ平坦な土地は鬱蒼とした樹木に覆われている(Haller-Trost 1998:227)。白灰色の珊瑚砂で縁取られた濃緑の島は、細長いハート型をしていて、遠くから見ると(あるいは空から見ると)、銀で縁取られたエメラルドの指輪のようである。

近くの他の島々が、ボルネオの大陸棚の上にあるのとは異なり、シパダン島は大陸棚よりも外側に位置しており、そこは海溝で隔てられた600~700メートルほどの深さの大洋海底から、急峻な斜面を伴ってせり上がっている。火山活動の結果とし、かろうじて山頂が海面に顔を出したものであり、浜辺から数百メートルほど離れた環礁に囲まれている。ただし船着場のある北側の浜辺だけは、ほとんど

環礁がなく、数メートル先から、そのまま深いドロップ・オフとなっている。その海中断崖にも珊瑚が群生しており、壁に沿って流されながらダイビングを楽しむための絶好のポイントとなっている。そこに限らず、島の周囲には、数多くのダイビング・スポットが点在している。

島はいわば海中に沈んだ単独峰の頂上部であり、島の北西2海里では海底の深さが1,470メートルに達し、東へ5海里の海底は1,030メートル、南へ4海里では1,410メートル、南西8海里では1,790メートルとなっている。珊瑚礁に囲まれ、外洋のただなかに浮かぶ島のゆえに、珊瑚礁の熱帯魚と外洋性の大型回遊魚の、それぞれの豊富な魚種を楽しむことができるのである(*ibid.*:228)。

また、シパダン島は、幅10~50メートルほどの白い砂浜に囲まれており、そこは、2種類の海亀、すなわちアオウミガメとタイマイの産卵場所となっている。1990年に世界野生生物基金が委託した調査によれば、10月26日から11月1日までの1週間のあいだに、毎晩4~10匹、平均で5.7匹のアオウミガメが上陸して産卵したという。サバ・タートル・アイランド・パークでの調査記録を参考に外挿すると、1年間では1,360~1,740匹の海亀が産卵すると推計される。ただし、それらの卵は、200年ほど前にスルーの سلطانから権利を授与されたという家筋の者が採取権を主張して、実際にある程度の採取をしている。島を取り巻く環礁の近辺で13回、計640分のダイブ観察をしたところ、30分間で平均6.2匹の亀を目撃することができたという。それらの85%はアオウミガメであり、残りがタイマイであった。1991年当時には、その数年前に島で最初にダイビング・ロッジを開発したボルネオ・ダイバーズが、島周辺でのダイナマイト漁を厳しく監視していたが、それ以前のダイナマイトの水中爆発による破壊の傷跡が当時でもはっきりと残っていたという(Motimfer 1991: 1-2)。

海亀卵の採取人の記憶によれば、1950年代から1970年代にかけて、産卵の最盛期には毎晩30匹から40匹が上陸し、年間では8,500匹ほどになったという。サバ野生生物局が卵の採取人の聞き取りから算出した数字によれば、1980年代には、4,380匹の健康な雌亀が産卵に訪れたと推計されるが、1996年にはその数が1200匹以下となってしまったという。その理由は、過剰な採取および観光開発のための環境破壊であるという。海亀の激減を危惧して、野生生物局は1997年3月に同島に海亀の孵化施設を建設するとともに、同じ時期に野生生物保護条例を制定し、その87条で海亀卵の採取を禁止し、違反した場合には5年以下の懲役または

2 南沙は、中国(7)、ベトナム(7)、フィリピン(8)、マレーシア(5)、台湾(1)、ブルネイの6カ国が領有を主張している(括弧内の数字は1999年末時点で実効支配中の島礁数)。また西沙は中国とベトナムの2カ国が領有を主張している。

3 日本でも、たとえば、今月の『中央公論』(2004年10月号)は、「日本の領土・日本の防衛：尖閣、竹島……領土を守ることを忘れてはいないか」と題された100頁ほどの特集を組んでいる。そのほかにも、日本が関わる領土問題については、別冊宝島1060号(2004)、明石康・他(2003)、牧野愛博(1998)などを参照。

5万リングットの罰金を課している。シパダン島でも厳密に適用されるというが、ただし父祖伝来の採取権を持つ者に関しては例外として一定数の採取を認める (*Borneo Mail* 2000/11/2, Isa 1989: 1-2).⁴

3. ダイバー誘拐事件：迷走した人質解放交渉

1990年4月24日、ちょうど復活祭の日曜日5時過ぎの夕暮れ時、2隻のスピード・ボートに分乗した6人の男が、AKライフルやロケット・ランチャーで武装してシパダン島に上陸した。浜辺に面したロッジのサンデッキなどでくつろいでいた外国人ダイバー10人と、従業員11人（マレーシア人9名とフィリピン人2名）をライフルの銃口を突きつけて脅しながらボートへと連れていった。スピード・ボートは夜陰にまぎれてフィリピン側領海へと逃走し、20時間ほど後にはホロ島に到着して、そのままトラックと徒歩で山中の隠れ家へと入った。ダイバーの国籍は、ドイツ人1家族3名、フランス人カップル2名、南アフリカ人夫婦2名、フィンランド人男性2名、レバノン人男1名であった。ほかにも、たとえばニューヨーク州から来ていたアメリカ人夫婦が危うく連行されそうになった。しかし、浜辺からスピード・ボートまでの短い距離さえ妻の方が泳ぐことができないと言い訳をして躊躇したところ、誘拐犯たちは別の人質に気を取られ、その隙に逃げ出して森のなかへと駆け込んだ (*Times* 2000/5/8, *Sunday Times* 2000/8/20)。

誘拐犯は、ミンダナオ島の南のバシラン島およびホロ島を拠点とするイスラム過激派のアブ・サヤフの一グループであった。彼らの活動は、少なくとも公的には、マニラ政府に対するイスラム勢力の分離独立運動と結びついたものであり、アル・カイダとも接触あるいは連携をもつとされていた。アメリカ人が人質とされていたら、事件は一層センセーショナルな扱いをされたことであろう。しかしアメリカ人がいなくとも、ヨーロッパ人の人質をその後4ヶ月あまりにわたってホロ島の山中深く密林のキャンプを転々

と移動しながら監禁し続けることによって、おもに独仏を中心としたヨーロッパならびにフィリピンおよびマレーシアの各国政府の憂慮と、マス・メディアの強い関心を引きつけたのである。

とりわけ、フィリピンや外国メディアの取材班をキャンプ地に受け入れて人質の撮影やインタビューに応じさせるなど、巧妙なメディアの利用と操作が効果的であった。しかも欧米の報道陣は取材のお礼として高額な謝金を支払い、人質を長期に拘束するための食糧やその他の必要品を犯人が入手することを容易にさせ、結果として彼らの活動資金を提供してしまったのである。また、外国メディアから資金を調達するという戦術がエスカレートして、誘拐犯グループやそれとは対立する別のグループが、キャンプ地へ向かう途中の取材陣を新たに人質としたりするなどの事件が生じた。たとえば6月3日には、ドイツのシュピーゲル (*Der Spiegel*) 紙の記者やRTLテレビのリポーターら10人の外国人ジャーナリストが、目的地に到着する前に拘束され、25,000ドルの取材費/身代金を払うことで10時間後に解放された。彼らは、インタビューをせずに引き返したが、適切な仲介人を立て取材費(謝礼)を支払い、人質とのインタビューや撮影に成功するグループもあった。

しかしシュピーゲル紙のドイツ人記者は運が悪く、あるいは適切な仲介者を得られず、7月2日に再度誘拐され25日まで拘束された後、身代金を払って釈放された。彼が誘拐されたとき、アブ・サヤフとの人質解放交渉に当たっていた大統領特別顧問のロベルト・アベンタハドは、政府の勧告を無視して自ら進んで誘拐犯のもとに出かけたのだから、シパダン島の誘拐人質事件の解決に一義的な責任を負うフィリピン政府としては、彼の解放交渉に当たる余裕がないとして、交渉の対象としなかった。そのことが、ドイツ政府、少なくともドイツのマス・メディアの反感と不興を買い、結果として、彼が身代金の一部を着服しているとの記事がシュピーゲル紙(2000/12/1)に書かれる要因となったと、アベンタハドは弁明している。その記事は、ドイツの諜報機関が、彼と誘拐犯のリーダーであるロボット

4 シパダン島とともに、マレーシア政府が海亀の保護に力を注いでいるのは、同じサバ州の東海岸、サンダカン沖合いに浮かぶタートル諸島である。9つの島から成る諸島のうち、6つがフィリピン領であり、3つがマレーシア領となっている。マレーシア側では、その全域を海亀保護区(タートル諸島公園)に指定して、そのなかのセリガン島には海亀の観察保護施設と監視所を設けている。また30人ほどが泊まれる観光客用ロッジがあり、日暮れから朝までは自由に浜辺を歩くことを制限し、ガイドとともに海亀観察エコ・ツーリズムを行っている。

またマレーシアとフィリピンは、1996年に「タートル諸島自然遺産地域」を定め、海亀の保護プロジェクトを開始している。複数国が協力して海亀保護を進めているのは、世界でも同地域だけである。しかし、フィリピン側の取り組みは不十分であり、「ウミガメは人間の引いた国境なんか知らない。でも、その線によって運命が分かれる」ことになる。たとえば、セリガン島から、昼間なら手が届くくらいの距離にあるタガナク島はフィリピン領であり、そこに住む2000人あまりの島民のなかには、卵の採取と販売で生計を立てている者も少なくないという。フィリピン領のタートル諸島では、採取した卵の3割を環境天然資源省が運営する孵化場へ、1割は海亀保護財団の運営費に、そして残りの6割には売買が認められている。

タガナク島はスルー諸島の最南端、サバ州に最も近くに位置するフィリピン領の島であるが、島で使われているのはマレーシア通貨のリングットであり、テレビもマレーシアの番組しか映らない。魚や卵の販売と日用品の購入、その他の日常生活は100%サンダカンに依存しており、国境を越えた往来については黙認されている。彼らの言葉はタウスグ語であるが、マレー語も頻繁に用いており、彼らがフィリピン人であることを自覚するのは選挙の投票の際くらいであるという(郷2000, Vitug & Yabes 1998: 51-58)

司令官との、衛星携帯電話による会話を一部始終盗聴した結果、身代金2,000万ドルの半分をエストラーダ大統領がピンハネし、その10%をアベンタハドに、残り40%のほとんどを大統領自身、一部を安全保障補佐官のアンヘロ・レイエス將軍に与えたというものであった (Aventajado 2004: 76, 104-109, 126).⁵

7月9日にはフランス第2テレビのスタッフ3人、続いてフィリピンのABS-CBNテレビの取材クルーなどが、別々に誘拐され、長期に拘束され身代金を支払う羽目となった。フランス第2テレビのスタッフが保持していた衛星携帯電話は、その後、誘拐犯のリーダーであるロボット司令官とフィリピン政府の交渉責任者であるアベンタハドとのあいだの、直接的な連絡の手段(ホットライン)となったのである。また、7月1日には、フィリピン人の熱狂的カトリック集団である「イエズス奇蹟十字軍」(Jesus Miracle Crusade)が、人質たちのために祈ることを目的として、牧師とメンバー数人を3000ドルと50俵の米の土産とともにキャンプ地に送り込んだが、逆に人質となってしまった。しかも所持品検査の際にメンバーのひとりが、「バナナ・リパブリック」(ファッション・ブランド名)が発売する、国軍の迷彩服に似た服を着た自身の写真を持っていたために、反イスラム自警団のメンバーであり宗教活動を装って潜入したことを疑われ、全員が死刑の判決を受けた。幸いなことに、首の切断による死刑判決の即自執行が直前に撤回され、代わりに、食べ物と飲み物のない状態での監禁放置による衰弱死の強制という方法が採られた。数日後にロボット司令官が様子を見に戻ると、メンバーたちは依然として神を褒め称える歌を歌い続けていたために、司令官はさらに心変わりして、その中の3人だけを選んで、ドイツ、フランス、南アフリカ、レバノン各国の大使へのメッセンジャーとして釈放し、残りのメンバーには飲食を与えて拘束を続けることとした (*ibid.*: 98-100).⁶

そうしたなか、7月13日には、ドイツ、フランス、フィンランドの外相がマニラを訪れ、長期化する事件への対応

策をフィリピン政府と協議した (Ressa 2003: 115, *CPJ News Alert* 2000/7/24)。誘拐の発生直後から、各国政府は、自国民の人質の安全と解放を最大の目標として、誘拐犯とは交渉をしないという国際的な合意を無視して、救出のための軍事作戦を控えることと、交渉による解決を図るよう、フィリピン政府に強い圧力をかけていた。その高圧的な態度に対して、アベンタハドは反感を覚えたという (Aventajado 2004: 38)。ただし、そうしたヨーロッパ各国の態度は、アブ・サヤフの別のグループの80人が、シパダン島の誘拐事件の直前、2000年3月20日に、シパダン島の人質を拘束しているホロ島の北約80キロにあるバシラン島トゥマフボン町で公立小学校をはじめ5つの学校を襲い、生徒や教師など53人を誘拐した事件と関係があるかもしれない。誘拐から1ヵ月後、シパダン事件の直前の4月19日には、イスラムの自治獲得あるいは分離独立運動への軍事攻勢を強めるエストラーダ大統領への誕生日プレゼントだとして、人質のなかの2人の男性教師の首をはねて殺害していた。また5月6日の軍の救出作戦では、ロエル・ガリャド神父を含む4人の人質が銃撃戦の巻き込まれて死亡した。その後、イスラム教徒の一部の生徒が釈放されたが、リビアの仲介と身代金の支払いによって人質全員が釈放されたのは、9月に入ってからであった (Torres 2001: 153-159)。

さらにまた、ロボット司令官は、マレーシア人や外国人の人質を、身代金の交渉の難航のゆえに何回にも分けて少人数ずつ解放することによって、解放のたびごとに問題が未解決のまま継続していることを効果的に印象付けたのである。6月下旬に最初に解放された人質はマレーシア人ひとりであり、外国人の人質のなかでは、7月17日にドイツ女性が持病の悪化のために身体が衰弱したことに対する人道的配慮から解放された。外国人の人質は、その後8月末に女性2人と男性3人、9月9日に4人の男性が解放された。フィリピン政府は、誘拐事件は犯罪であるとの立場から、身代金の支払いで事件の解決を図ることを公式には一貫して拒んでいたが、当時から、リビア政府が介入し、身

5 アベンタハドは、その記事に激しく抗議し、弁明の書簡をシュビーゲル紙 (2004/12/25) に掲載することを認めさせたが、記事の撤回と謝罪の要求は受け入れられなかった。

同様に、シパダン誘拐事件からほぼ1年後の2001年5月27日に、フィリピン・パラワン島のドス・パルマス・海浜リゾートから誘拐され、ホロ島の北に浮かぶバシラン島やミンダナオ島西端の南サンボアンガ州の山中で1年以上にわたって拘束されていたアメリカ人グレース・バーナムは、解放後に出版した著書 (Burnham 2003) のなかで、1) 国軍は、山中に潜伏したアブ・サヤフに食糧などの物資を補給支援した、2) 国軍は、バシラン島ラミタンの病院に誘拐グループを追い詰めた際に故意に逃した、3) 国軍幹部はアブ・サヤフと共謀して身代金の一部を着服しようとしたなどと暴露している。しかし、その後逮捕された誘拐犯メンバーの裁判の過程で、2004年7月末に国家警察基地で開かれた非公開の尋問に応じたバーナム夫人の証言の内容について、「疑惑に関する発言はなかった」とする検察と「発表は信用できない」とする国会議員らが対立したまま、内容の真相は不明のままである。また、それに先立って、著書の出版後にカンザス州に住む夫人を訪ねて事情聴取を行った司法省は、「夫人が著書で記した国軍とアブ・サヤフとの関係は、すべて伝聞に基づく情報であることが判明した」との見解を公表している (マニラ新聞2004/8/2)。バーナム夫人の夫のマーティンは、聖書の現地語翻訳によってキリスト教の伝道を進める SIL (Summer Institute of Linguistics) のパイロットであり、夫人とともに誘拐され拘束されていたが、2002年6月7日の人質救出作戦の際に、銃撃を受けて死亡している。

6 フランス第2テレビのスタッフ3人と、「イエズス奇蹟十字軍」の残りのメンバーは、シパダン島の人質とは少し離れた場所で拘束されたまま、シパダン島の人質が9月に解放される際に、一緒に解放された。その際、フランス第2テレビにスタッフ3人には100万ドル、「イエズス奇蹟十字軍」には200万ドルの身代金が支払われた (Aventajado, 2004: 155-56)。

代金を払うことで解決にいったと言われていた。実際、解放された人質たちは、各々の国へ戻る途中、フィリピンからリビアに立ち寄り、盛大な歓迎式典に参加し、ダダフィ大佐に対して深い感謝の意を示したのである。

また、ロベルト・アベンタハド自身が、事件の概要と交渉の進展を詳細に記した自著のなかで、ドイツ政府が100万ドル、リビア政府は900万ドルの、計1000万ドルを支払ったと明言している。アベンタハドによれば、ロボット司令官は初めから一貫して、外国人の人質ひとりに対して100万ドルの身代金を要求し、それに対して70万ドルの値切り交渉をしたが結局は相手の言い値を飲む以外なかったという。さらにアベンタハドは、リビア政府が用意して特使に託したと言われている2,500万ドルのうち、残額の1,600万ドルが行方不明である点については、リビアの特使であり実際に交渉の席にもしばしば立ち会ったアザロク博士の可能性を示唆している (Aventajado 2004: 191-195, *Expatica* 2003/12/10)。

いっぽう誘拐を実行したアブ・サヤフ・グループのリーダーのロボット司令官ことガリブ・アンダンは、2003年12月9日に国軍との戦闘で負傷して捕えられ、尋問の際に、人質解放の際の身代金として4億ペソ（約10億円）を入手し、グループの活動資金として使ったが、うち自身が1,000万ペソを着服したことを認めた。が、同時に、フィリピン政府側の交渉役であったアベンタハドや国軍の高官が、本来アブ・サヤフ側に届けられるべき身代金の一部をピンハネしたこと糾弾しているという。さらには、アベンタハドとマレーシア側の交渉担当のユソフ・ハムダンは、互いに相手が身代金の一部を着服したと非難しあっている (*Inquirer News Service* 2003/12/12)。

そもそも、アベンタハドとロボット司令官との人質解放の条件をめぐる初期の交渉では、ロボット司令官は身代金のことは一切触れず、政治経済的要求を認めさせるために引き起こしたと説明していた。彼が提示した条件は、1) イスラム教徒が自らの国家を作ることを認めて宣言すること、2) マレーシア・サバ州のフィリピン人出稼ぎ労働者(大半はミンダナオ南部およびスルー海域出身のイスラム教徒)の虐待に関する調査委員会をマレーシア政府に設置させること、3) ミンダナオならびにスルー海域で操業している、台湾や中国の漁船の取締りを強化し、締め出すことの3点であった。アベンタハドは、外国漁船の締め出しについては合意したが、イスラム教徒の分離独立を認めることや、マレーシア政府に委員会を設置させることを確約できないとして拒否した。それで、結局は身代金による解決に向けて、金額の交渉が焦点となったのである (Aventajado 2004: 60-62)。

リビア政府が、今回の人質事件に関与することができた

のは、1970年代初頭以来、ミンダナオ島のイスラム教徒に対して、宗教施設の建設や開発民生援助を行ってきたからであった。1976年には、マニラ政府からの分離独立を主張して激しい武力闘争を行っていたモロ民族放戦線 (NLF) とマルコス政権との調停役として、トリポリ協定の締結に尽力した実績もあり、政府とイスラム勢力の双方とに強い絆を有していた。トリポリ協定では、ミンダナオにムスリム自治区を設置することを確認していたが、実際にそれが実現するのは20年ほど後のことになる。そのトリポリ協定締結の斡旋をしたイスラム委員会の委員のひとりであったのが、ラジャ・アザロク博士であり、1990年から1999年までマニラ・リビア大使を務めた後に、カダフィ国際慈善団体の理事長となっていた。フィリピンにおけるイスラム問題への造詣の深さと長年にわたる実際の関与のゆえに、アブ・サヤフ側から信頼を得ており、また独仏などの政府も、フィリピン政府に対するよりもリビア政府の介入の方に大きな期待を寄せたという。

しかし、2人のフィリピン人が人質として囚われ、犯人がフィリピン国内に潜伏している事件の解決が、ヨーロッパ各国政府とリビア政府とによって頭越しに進められることに傍観を決め込むことは、フィリピン政府の威信を失墜させることにつながった。そこでアベンタハドは、アザロク博士とはまったく別の人脈をたどり、ロボット司令官と接触を取り、衛星電話を使って直接に、また、ロボット司令官が指名した密使を通して人質解放の交渉に当たったのである。フィリピンとリビアというふたつの交渉が平行するかたちで進められたたうえに、フランス政府が、人質事件の取材に訪れたまま誘拐されてしまった自国のジャーナリストの解放も合わせて交渉することを強く望んだために、事態は迷走し長期化することとなった。さらには、マレーシア政府も独自のルートで交渉を進め、事件から61日目の6月24日に身代金1,500万ペソ (33万ドル) と交換にまず1人の解放に成功した。それから2ヶ月間のあいだに、順次マレーシア人の人質が解放されていったが、計9人の身代金の総額は300万ドルに達したという (Luz 2000)。

4. アブ・サヤフ・ゲリラ：イスラム 分離独立運動の鬼っ子

シバダン島という小さな島で起きた誘拐事件は、マレーシアとフィリピンの国境を越え、さらには、ドイツ、フランス、フィンランド、リビアの政府を巻き込みながら錯綜して展開していったが、そもそもそれを実行したアブ・サヤフ自体が、グローバルなネットワークのなかで誕生したものであった。アブ・サヤフとは、アラビア語で「剣を帯びる者」の意であり、1991年にモロ・イスラム解放戦線

(MILF: Moro Islamic Liberation Front) の平和的あるいは妥協的方针に飽き足りないアブドゥラジャク・アブバカル・ジャンジャラニ師が設立した。ジャンジャラニ師は、1980年代にリビアとサウジアラビアのイスラム学校に通ったのち、1987年にはトリポリに移ってイスラム神学を学んだ。さらにはアフガンに赴き、フィリピンのミンダナオ南部地域からリクルートされてきていたイスラム原理主義の若者らとともに、対ソビエトのゲリラ戦に身を投じたのである。

その後、ミンダナオに戻ってアブ・サヤフを組織し、神学校時代のフィリピン人留学生らを勧誘して中核に加えながらバシラン島やホロ島、スルー海域で勢力を拡大していった。アブ・サヤフという名称は、アフガン時代に強く影響を受けたアフガン・イスラム運動の指導者であり、軍事司令官のアブドゥル・ラスル・サヤフ師にちなんでいる。また、1991年に帰国する前には、ビンラディン師を介してラムジ・ユセフに会って意気投合し、ユセフを伴って帰国し、ユセフがアブ・サヤフとアル・カイダをつなぐキーパーソンとなったという。ユセフは、1993年のニューヨーク世界貿易センタービル爆破事件の首謀者として、後に逮捕されることになるが、1994年12月10日には、セブ発成田行きフィリピン航空434便の機内洗面所に爆弾を仕掛けて飛行中に爆発させ、日本人1人を死亡させている。それはアメリカ航空機11機を同時爆発するテロ作戦のための予行演習であったというが、本作戦を実行する直前の1995年1月6日にマニラのアパートで爆弾の製造調整をしているときに失敗して失火したためにアジトが発覚してしまった。その時には、ラムジ・ユセフはかろうじて脱出し、国外に逃れたが、1997年に逮捕されている (Abuza 2003: 99-108)。

1998年12月にバシラン島でのフィリピン国軍との戦闘により、ジャンジャラニ師が死んだ後、弟のカダフィ・ジャンジャラニが後継リーダーとなった。しかし、兄ほどのカリスマ的魅力や指導力を欠いたために、アブ・サヤフは指揮系統の確立した組織というよりも、幾つかの派閥に分かれて各々が自立性を保ちながら、必要に応じて緩やかに連携協力して個々にゲリラ的活動や作戦を行うようになっていた。シパダン島の誘拐を実行した司令官ロボットことアンドンもそうした一派閥を率いる小ボスのひとりであり、彼は入手した身代金を他の小ボスたちにも分配したという。シパダン島の人質事件が最終的に解決される当日も、身代金を運ぶ2台のジープを別のグループが待ち伏せ攻撃をしかけて護衛が負傷するなど、あやうく大金を奪われるところだった。

ミンダナオ・イスラム居住地域の自治拡大や独立を目指す軍事政治組織には、タウスグ民族を母体とするやや世俗

的イスラムで平和交渉に力点を置くモロ民族解放戦線 (MNLF: Molo National Liberation Front) と、マラナオ民族を母体としてイスラム性と武力闘争とを重視するモロ・イスラム解放戦線 (MILF) とがある。しかしこの二つの組織が、ともに硬軟両用のバランスのなかで政治戦略を進めているのに対して、アブ・サヤフは、テロによる揺さぶりや誘拐による資金獲得という暴力的な手段に大きく依存してきた。たとえば1995年4月には、サンボアンガ・デル・スルー州のキリスト教徒が多数住むイピル町を攻撃し、そこの市民と兵士53人を射殺している。シパダン島の誘拐が起きる直前、2000年3月末にはホロ島の北80キロに位置するバシラン島のトゥマフボン町を襲い、50人あまりを誘拐した際には、解放条件として世界貿易センタービルの爆破犯として240年の刑で服役中のユセフを釈放するための圧力をアメリカ政府に加えるように要求したのである。

さらに、その後、同年の9月10日には、アブ・サヤフの別グループが再び海の国境を越えて同じくサバ州東岸のパンダナン島の海浜リゾート施設を急襲し、3人のマレーシア人従業員を人質として連れ去った。前回と同様にホロ島の山中に潜伏して身代金の交渉を続けたが、欧米人の人質がないために国際的な関心は薄く、45日後にフィリピン政府軍の作戦によって救出された。いっぽう、フィリピン国内においては、別グループが、2001年5月27日にパラワン島の海浜リゾート施設を襲って、2人のアメリカ人を含む20人を人質として拉致し、高速ボートでバシラン島へ逃走した。アメリカ人の人質ふたり (SILの宣教師支援のための航空パイロットのバーナム夫妻) は、その後、山中のジャングルのキャンプ地で1年と11日にわたって拘束されることになる。アメリカ軍の支援をうけたフィリピン軍の急襲作戦の際には、不幸にして夫が銃弾に当たって死亡し妻も足に被弾した (Ressa 2003:104-107, 116-123, Burnham 2003)。

ただし、そうしたアブ・サヤフのテロ活動は、一方的な先制攻撃あるいはテロリズムというよりも、フィリピン国軍の攻勢に対して、ミンダナオ島のイスラム勢力が劣勢に置かれているという一般的な状況のなかで、正面戦はもとよりゲリラ戦でも対抗することが困難な小集団が手段を選ばぬ反撃を試みたもの、あるいは混乱に乗じて軍資金の確保を狙ったものと捉えることもできる。とりわけ1998年6月にエストラダ大統領が就任してからその傾向が強まっていた。大統領は自分の大衆的な人気の源が、かつて活劇映画のなかで演じた貧者の味方、正義の執行者としてのイメージであることを強く自覚していた。それゆえ、就任時の熱狂が覚め、変わらぬ現実に失望した大衆の支持率が下がり始めた頃、その人気回復のために、イスラム勢力に対

して高圧的な態度を取ることで強い大統領を演じ、さらに実際にミンダナオ島のイスラム勢力に対して積極的な攻撃を仕掛けたのである。

フィリピン国軍が攻勢をかけるきっかけは、2000年の初め頃に MILF が、マギンダナオ州のタラヤン-シャリフ・アグアク間の国道線を道路封鎖し、タラヤン郡役場を占拠した事件である。それに対して、フィリピン国軍は増援部隊を派遣し、MILF 側との緊張が高まっていたが、さらに3月15日にはラナオ・デル・ノルテ州イヌダラン村付近で、国軍と MILF との直接的な戦闘が行われた。3月17日には同州のカウスガン郡役場も占拠しフィリピン国旗を降ろして MILF の旗を掲揚した。それに対して、エストラダ大統領は、「ムスリム・テロリストに対する全面戦争」を宣言し、ミンダナオ島で大小合わせて48ヶ所の MILF 軍事拠点を攻撃したのである。その戦闘は、7月9日に MILF の司令部が置かれた最大拠点であったアブバカル基地が陥落したことをもって終了したが、国軍の発表によれば、その5ヶ月間で、MILF 側に1,089人の死者と1,722人の負傷者、国軍側に273人の死者を出した。

アブバカル基地は単なる軍事基地というよりも、マギンダナオ州の4つの町とラナオ・デル州の2つの町を含む、100平方キロほどの広大な土地一帯で、イスラム教徒の人々がイスラムの教えに基づいた生活を営む地域コミュニティでもあった。道路沿いには商店や食堂があり、郵便局がありビジネスが行われていた。また後背地として山岳地帯と深い森、渓谷と川と湖があり、政府軍の攻撃を逃れるための脱出ルートとして有効であった。また肥沃な土地を耕す農民がおり、一定期間ならばその内部で自給自足も可能な経済基盤をもっていた。基地の陥落は MILF の一時的な軍事敗北であるとともに、一般住民にとっては、生活の場を追われて国内難民となることを意味していた。アブバカル基地の陥落直後に勝利の確認と宣伝を兼ねて視察に訪れたエストラダ大統領が、レッチョン（豚の丸焼き）とサン・ミゲル・ビールで兵士をねぎらったこと、それが新聞やテレビで大きく報道されたことは、イスラム教徒に対する心理的な挑発や冒瀆をあえて犯すことであった。アブバカルに限らず、48ヶ所の基地の中や周辺に住んでいた住民（イスラム教徒）は、すべて難民となり、戦争の終結後も避難生活を送ることを余儀なくされたのである。その数は十万人の単位に達するといわれる (Espina-Varona & Villaviary 2002)。

シパダン島での誘拐に始まり、ホロ島の山中で人質解放の交渉が行われていたのは、そのようなイスラム勢力に対する激しい国軍の攻勢がミンダナオ各地で続けられていた時期であった。

5. 領有をめぐる争い：国際司法裁判所の判断

シパダン島は、1980年代半ばにボルネオ・ダイバーズが宿泊ロッジを建設し、ダイビング・リゾートとしての観光開発を始める前までは、漁師や海亀の卵を集める者が時に立ち寄るだけの無人島であった。マレーシアとインドネシアとのあいだで、シパダン島の帰属が最初に問題となったのは1969年であり、マレーシアが同島を領海内に組み入れた地図を作製したことに対してインドネシアが抗議したのである。

その後、1982年にインドネシア海軍の巡視艇がシパダン島に駐屯していた「外国軍小隊」を「臨検」したことにより、領有問題の存在が明らかとなったが、両国政府がマス・メディアでの報道を抑えたために、その詳細が明らかにされることはなかった。以後、同島（および近くのリギタン環礁）の帰属問題をめぐって、断続的な交渉が続けられたが解決に至らず、1996年10月にマハティール首相とスハルト大統領のあいだで、帰属問題を国際司法裁判所の裁定にゆだねることが合意され、1998年11月に提訴されたのである。

その後、2000年3月には、マレーシアの独立後から、サバ州の領有を一貫して主張しているフィリピン政府が、同島はサバ州に属するゆえにフィリピンの領土であると主張して、裁定手続きへの介入を試みた。フィリピンの主張は、同島に対しては直接の利害関心を有していないが、同島の帰属がマレーシアとインドネシアの両国間で決着することが、結果としてサバ州領有に関するフィリピンの年来の主張に影響を及ぼすことを避けるためであった。しかし、同島の帰属をめぐる問題は、フィリピンの法的利害に直接に関与するものではないとして、2001年6月、14対1で却下された。司法裁判所は2002年6月3日から12日の間に、2度の聴聞会を開くなどして両国の主張を検討し、2002年12月17日にシパダン島がマレーシアに帰属するとの裁定を下したのである。以下では、領有問題の背景と、インドネシア側およびマレーシア側の主張の根拠、それに対する裁判所の判断と裁定の根拠について紹介する。

そもそもの始まりは、1957年8月にマレーシアの前身であるマラヤ連邦がイギリスから独立し、1963年9月には英国領であった北ボルネオ（サバ州）とサラワク州が連邦に加入する直前の頃のことである。1963年1月にインドネシアはマラヤ連邦に対して「対決政策（コンフロンタシ）」を採ることを宣言して、外交関係を断絶し、北ボルネオへの義勇軍の介入や公海上で漁船の襲撃を行った。この「対決政策」は1966年まで続き、1969年になって初めて両国は条約を締結し、マラッカ海峡および南シナ海の大陸棚境界を画定した。しかし、その際にシパダン島を含むセレベス海

については国境線の合意に至らず、インドネシアは現状維持として将来の交渉にゆだねることを提案し、一方マレーシア側はそれへの回答を留保し、後に同島における幾つかの「開発」を行った（Haller-Trost：229-230）。また、インドネシアが「対決政策」を始める前の1962年6月にフィリピンは、突然北ボルネオがフィリピン領であると主張し始めていた。その根拠は、スルーの سلطانとイギリス北ボルネオ会社が1878年に調印した条約は、土地の割譲ではなく貸与を認めるものであり、スルー・ سلطانの権限を引き継いだフィリピンが北ボルネオに対する主権を有するというものであった。⁷

国際司法裁判所において、インドネシア側の主張の根拠は、オランダとイギリスとの1891年会議の合意書であった。その第4条において、「(ボルネオ) 東海岸の北緯4度10分の地点から、国境線はセビティック島を等緯度線で横切って東に延長されるものとする」と定められていた。その北緯4度10分の緯度線を東に延長すると、シバダン島（およびリギタン環礁）は、それよりも南に位置しているゆえに、必然的にオランダ領に属することになると主張した。そして、インドネシアは、旧オランダ領をそのまま国土として引き継いだゆえに、シバダン島の領有権を有するというものである。

そのことに対して司法裁判所は、「横切って東に延長されるものとする」という表現が実質的に意味するところを、1891年会議そのものの目的と当時の状況をふまえて検討し、それがセビティック島の東端にいたるまでの国境線を画定するにとどまり、その先の海上においても効力を発揮するものではないと判断した。確かにセビティック島は、ボルネオの東北海岸部の入り江に浮かぶ島であり、北側対岸はイギリス領、南側の対岸はオランダ領であり、ボルネオにおける両国の陸の国境線は、セビティック島のちょうど西の対岸地点で海に至り、海峡をはさんでセビティック島に達していた。イギリスとオランダの両国にとっては、それぞれ目と鼻の先にある島の帰属については直接的な利害関心を強く有していた。それゆえに同会議の重要な議題のひとつになったのであるが、当時は、遠方の海上に浮かぶ小さな無人島であるシバダン島についての関心は薄かったのである。

実際、オランダ側が合意書の批准その他のために作成した解説文書に添付した地図には、北緯4度10分の国境線がセビティック島を横切って、そのまま等緯度で東に延びて記入されている。しかしながら、司法裁判所は、その地図

にはシバダン島は書き込まれておらず、それがオランダ側の関心事の外に置かれていたことを示すものとの判断を下した。また、その解説文書と添付地図はハーグにあったイギリス代表部に送付され、ロンドンへと転送されたものの、イギリス側からの抗議その他がなかったことについて、シバダン島の帰属をめぐる両国間に係争問題が存在するとの認識を持っていなかったからであるとした。（国際司法裁判所ホームページ掲載判決文・2002/12/17, General List No. 102）

ただし、その一方で、司法裁判所は、北ボルネオ地域がイギリスから独立してマレーシア連邦へと編入したことにともない、シバダン島の領有が自動的に継承されたとする、領有権の委譲の連鎖にもとづくマレーシア側の主張も却下した。その主張は、そもそもシバダン島は、スルー海域を支配する سلطانの版図に入っていたものであり、そこからフィリピンを植民地としたスペインへ、さらにアメリカへ、そして戦後は北ボルネオを直轄領とする大英帝国へ、最終的にマレーシア連邦へという、「領有権の連鎖」理論にもとづいていた。それに対して、司法裁判所は、そもそもスルーの سلطانがシバダン島に実質的な主権を及ぼしていたかはなほ疑問であり、またスペインもシバダン島に対する主権を主張することが可能ではあったが、それを実際に主張したことを示す証拠はなく、さらにアメリカも、スペインとのあいだで結ばれたフィリピン割譲に関する1898年と1900年の条約によって、どの島まで獲得したのかについて明確な認識を有していなかった。よって司法裁判所は、マレーシア側の主張の根拠もきわめて薄弱であると判断したのである（*ibid.*）。

条約をはじめとする歴史的な経緯にもとづく両国の主張を等しく却下した後で、裁判所は、島の帰属を確定するために、支配の「実効性（effectivites）」に着目し、それを判決の拠りどころとした。ただし、島の領有をめぐる問題が表面化した1969年以前のみを検討の対象とし、それ以後の事態の進展、とりわけマレーシア側によるダイビング・リゾートとしての開発については考慮の外とした。1961年以前のシバダン島をめぐる主権の行使の事例として、インドネシア側が具体的な証拠を伴って主張したのは、1921年にオランダ海軍の船舶 Lynx が同島に停泊し、部隊を上陸させたことであった。他の島々においては、イギリスの主権を尊重して上陸行動などは控えていたが、シバダン島でそうした活動を行ったのは、そこに主権が及んでいると認識していたからであったと主張したのである。しかしながら、

7 フィリピン政府のサバ領有宣言の背景を詳細に分析した Noble は、その宣言が過去のフィリピン外交政策とも、当時の国益とも合致していないゆえに関係諸国に驚きと当惑をもって迎えられたことを指摘したのち、フィリピンが領有を主張したのは、アメリカの植民地支配を脱し、今や完全に独立した主権国家であるとの自己イメージを明確にし、それを内外に積極的に宣伝するためであったとしている（Noble 1977）。

裁判所は、同船舶の活動は、オランダとイギリスが協力して実施した、海賊取り締まりのための合同作戦の一環としてであり、必ずしも単独の主権行為ではなかったとした。また、インドネシア側が、シバダン島周辺においては自国民の漁民が頻繁に漁労活動や上陸をしていると主張した点については、民間人の行動は国家主権の行使とは無関係であるとして却下した。

それに対して、マレーシア側の提出した証拠に関しては、以下の3点を確かに同島に対する主権の行使と認め、それに基づいてイギリス＝マレーシアの実効支配を認定したのである。第1は、1900年代の初めからイギリスの植民地当局が、同島で海亀を捕獲したり、その卵を採取する活動に対して、保護の観点から一定の規制を課し、また漁民同士のあいだで問題が生じたときには、その調停の労をとっていた。第2には、1933年にイギリスの植民地当局はシバダン島を渡り鳥の保護区として設定して布告を出すとともに、それを官報に掲載した。第3には、1962年と1963年にイギリス植民地当局は、それぞれシバダン島とリギタン環礁に灯台を設置し、以後、その維持管理は現在に至るまでマレーシア政府によって継続されている (Colson 2003: 403-404)。

6. おわりに：環境保全のシンボルへ

世界中からシバダン島を訪れるダイバーたちにとって、そこは世俗を逃れ、俗事を忘れて至福の時を過ごす楽園である。海の深い青さ、島の濃い緑と白砂の縁取り、無重力の宇宙遊泳を楽しんでいるような海亀の優雅な動き、巨大な円柱となって旋回するバラクーダの群舞、潮流に逆らってギンガメアジやバッファローフィッシュの群れがゆっくりと動いてゆく迫りに満ちた進軍、すべてが美しく幻想的である。短期の滞在をして、夢の時間を堪能して帰れば、この世とは思われない一点の汚濁もない世界である。

しかし、そこは、領有をめぐるふたつの国が諍いを続けた後に、国際司法裁判所によって平和的な決着が得られた稀有な場所である。また世界の中心から遠く離れた片隅にある楽園でありながら、アル・カイダのネットワークとゆるやかにリンクして活動していたフィリピンのアブ・サヤフ・ゲリラが、世界中の特にヨーロッパの関心と憂慮を集めた誘拐事件を引き起こした場所である。誘拐が可能であったのは、マレーシアの治安の盲点をつき、フィリピン

側から高速ボートで国境を越えて急襲し、再び国境を越えて安全地帯へ逃げ込むという、国境線を逆手に取った戦術であった。その海域に棲む海亀たちもまた自由に海の国境を越えながら、シバダン島をはじめマレーシア側で生まれた卵は保護されて孵化後には海に放されるが、フィリピン側では建前としても半数以上が、実際には9割以上が食べられたり売られたりしてしまう。海の国境線のどちらかに生まれるかが海亀の生死の境目となっている。

さらに、本稿では、紙幅の制約のために言及することができなかったが、シバダン島のダイビング・ショップ・リゾート施設の従業員の多くはフィリピンからの出稼ぎ労働者であり、誘拐事件の以前はスルー諸島から小船にのって「裏口」から入国した人々であり、ほとんど全員がパスポートを保持していなかった。国境は有って無いも同然であった。いっぽうシバダン島からスピード・ボートで15分ほど離れたところに浮かぶマブール島には、より快適なりゾート・ホテルが二つあり、シバダン島へのダイビング基地として日本人に人気が高いが、シバダン島と異なり、2千人ほどの住民が住んでいる。その多くは、1970年代前半にミンダナオ島南部からスルー海の島々に住むイスラム教徒が、分離独立を求めてマニラ政府と戦ったホロ戦争の際に、難民となって逃れてきたタウスグ人であり、一部はそれ以前に住み着いていたバジャウの漁民である。ミンダナオ、スルー海域のイスラム教徒による分離独立運動と、それへの苛酷な軍事作戦がもたらした傷跡が、現在に至るまで彼らの貧困として、また望郷の念のなかに刻印されている。⁸

最後に付言しておかなければならないのは、本論で取り上げた二つの出来事を契機として、この一兩年のあいだに、シバダン島が、さらに大きな転換を迎えようとしていることである。まず誘拐事件の後、マレーシア政府は、サバ州東海岸地域の国境警備を強化するために、1億1千ギット (約30億円) 以上を投じて、10隻以上の高速警備艇や数機の哨戒機を購入したほか、23の島々に海軍や警察の要員を常駐させて、従前の監視体制と有事即応体制を整備し補強した (Daily Express 2004/6/17)。

一方、領有問題が解決してからは、シバダン島の環境汚染や破壊に対する危惧や懸念がサバ政府高官から表明されるようになり、2004年4月には、サバ州政府から同島にある6つのダイビング宿泊施設に対して、年末までに施設を撤去し、撤退するよう指示が出された。⁹ それよりずっと以

8 さらに、戦争の終結後も現在に至るまで、武装したイスラム教徒とフィリピン国軍との小規模な衝突と紛争が断続的に続き、経済社会発展は停滞したままである。それゆえ、安全と職を求めサバ州に流入する出稼ぎ労働者や難民は減ることがなく、同州に滞在するフィリピン人は30～40万人に達すると推定されている。

9 シバダン島に、最初の宿泊施設が出来たのは1988年で、ボルネオ・ダイバーズが20室ほどの小さなものを建設した。その後、年々その数が増え、1995年には6施設となったのである。2002年までに同島を訪問した観光客は、135,000人に達するという (Sabah Times 2002/12/22, ただし、延宿泊日数は不明)。政府高官の相次ぐ発言以前にも、サバ州の有力紙である Daily Express は、シバダン島の環境破壊の現状

前、領有が確定する以前から、各施設に対して、宿泊できる客は20人を限度とするよう指示が出されていたが、実際には、ハイ・シーズンにはそれ以上の客を受け入れていた。ひとりの客に対して世話をする従業員は最低ふたり必要であることから、同島には常時300人ほどが滞在している計算となる。それ以外に、他の島やボルネオ島のセンポルナの町からボートダイブで来て上陸休憩をするダイバーなどを含めると、島のエコシステムの均衡を一気に破綻させかねない過重な環境負荷がかかっていたことになる。とりわけ、ゴミ処理（実質ゴミ放棄）と飲み水の確保（地下水の過剰汲み上げにより地下水に海水塩分が混入し植物に悪影響を与える）という問題、ならびに照明や騒音やダイバーの散策などによって海亀の産卵が妨害される問題などが深刻であった。

建前としては、そうした環境破壊に対する危惧から、同時に、ダイバーを誘拐から守るための監視体制を維持するコスト負担への考慮から、シバダン島からの宿泊施設の撤去を命じたと考えられる。しかし、同時に、観光を基幹産業とし、その拡大発展を模索する州政府にとっては、2000年にユネスコ世界遺産に登録されたキナバル山に続き、シバダン島をユネスコ遺産として登録するための準備作業が宿泊施設の撤去命令であった（*Daily Express*, 2004/5/19, *New Sabah Times*, 2004/5/19）。海拔4000メートルを超える東南アジアの最高峰であるキナバル山が、山と森の魅力を集約して体現して聳え立つのに対して、ジャック・クストーが1ヶ月以上滞在してドキュメンタリー映画を製作し、世界のベスト10・ダイビング・スポットのひとつとして激賞したシバダン島は（Chong 2004）、海洋の魅力を集約体現して浮かぶ海の翡翠である。そのふたつをボルネオの象徴であり世界遺産として前面に押し出して宣伝することにより、その象徴をとおして想像されるボルネオの「手付かずの自然」の美しさは、観光客を引き付けて止まぬ魅力をいっそう強化されることになる。

マレーシアのクアラルンプールからも、フィリピンのマニラからも、最も遠く離れた辺境の小島が、中央からのコントロールの効きがたきのゆえに、逆に国民国家の軌轍が集約して現れ、同時にそのコントロールを通じて、国家の外縁の画定と良きイメージ作りが実践されることは以上に見たとおりである。小さな島のなかに刻み困れた近代の軌轍は深くまた入り組んでいる。

— 参考文献 —

- Abuza Zachary, 2003, Militant Islam in Southeast Asia: Crucible of Terror, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers.
- 明石康・他 2003『日本の領土問題』自由国民社（虎ノ門DOJO ブックス）。
- Aventajado, Roberto, 2004, 140 Days of Terror: In the Clutches of Abu Sayyaf, Pasig City: Anvil Publishing.
- 別冊宝島 2004『奪われる日本！』別冊宝島1060号, 宝島社。
- Burnaham, Gracia, 2003, In the Presence of My Enemy, Wheaton, Illinois: Tyndale House Publishers.
- Chong, Kan Yaw, 2004, “Tourism-minus the eco-responsibility,” *Daily Express* May 16.
- Colson, David, 2003, “Sovereignty over Pulau Ligitan and Pulau Sipadan (Indonesia/ Malaysia),” American Journal of International Law, Vol.97, No.2.
- Esipina-Varona, Inday, & Villaviary, Johnna, 2002, “Capture of MILF Camps Has Downside for Gov’t,” “Islamic Way of Life,” “Government Struggles with ‘Hearts and Minds’ Campaign among Muslims” Manila Times, June 18-20.
- 郷富佐子 2000 「南の島々の物語 3・タートル諸島」朝日新聞夕刊1月31日 p.5.
- Haller-Trost, R., 1998, The Contested Maritime and Territorial Boundaries of Malaysia: An International Law Perspective, London: Kluwer Law International.
- Isa, Md. Gimin, 1989, The Study of Effect of Tourist Site Development and Egg Handling Technique on Green Turtle, Chelonia Mydas in Sipadan Island, Sabah, Malaysia, Project Paper Submitted to Universiti Putra Malaysia.
- 石川登 2004「国家が所有を宣言するとき：東南アジア島嶼部社会における領有について」三浦 徹・関本照夫・岸本美緒・編『比較史のアジア：所有・契約・市場・公正』東京大学出版会。
- Luz, Kristina, 2000, “The Jolo Diary” Asiaweek Vol.26, No.38 (Sept. 29)
- 牧野愛博 1998『尖閣・竹島・北方四島：領土問題テキストブック』朝日新聞社総合研究センター調査研究室・社内報告, 234.
- Mortimer, Jeanne, 1991, Recommendations for the

を報告し警鐘を鳴らす、ニココ・ファビアン記者の「シバダン島の環境を守れ」と題された連載キャンペーン記事を掲載している。（Nikko Fabian “A Sharp Decline in Turtles Coming to Sipadan,” “Urgent Measures Urged on Sipaan,” “Operators: Situation is Bad,” “Boat Propellers ‘maiming turtles’,” etc. *Daily Express*, April 4~12, 1996）

- Management of the Marine Turtle Populations of Pulau Sipadan, Sabah, Report Produced Under WWF Project No. 3863.
- Noble, L.Gardner, 1977, Philippine Policy toward Sabah: A Claim to Independence, Tucson: The University of Arizona Press.
- Ressa, Maria A., 2003, Seeds of Terror: An Eyewitness Account of Al-Qaeda's Newest Center of Operations in Southeast Asia, New York: Free Press.
- Pereira, Brendan, 2002, "KL and Jakarta Show Maturity in Isles Row," The Strait Times, Dec. 18, Asia: 9)
- Pereira, Brendan & Devi Asmarani, 2002, "KL Wins Claim to Sipadan and Ligitan: Isles of Contention," The Strait Times, Dec. 18, p.3.
- Shahar, Yael, 2000, "Libya and the Jolo Hostages: Seeking a New Image, or Polishing the Old One?" ICT article, Aug. 20.
- 床呂郁哉 1999 『越境：スルー海域世界から』岩波書店。
- Torres, Jose, Jr., 2001, Into the Mountain: Hostaged by the Abu Sayyaf, Quezon City: Claretian Publicatios.
- Vitug, Marites & Criselda Yabes, 1998, Jalan-Jalan: A Journey through EAGA, Pasig City: Anvil Publication.
- Warren, James Francis, 1985 [1981], The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of Southeast Asian Maritime State, Quezon City: New Day Publishers.
- Wong, Michael Patrick, 1991, Sipadan: Borneo's Underwater Paradise, Singapore: Odyssey Publishing.

付記：本稿は、平成13年度～平成15年度文部科学研究費補助金国際学術研究(基盤研究A-2)「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」(研究代表・パトリシオ・N. アピナレス京都大学東南アジア研究センター助教授)の報告書(未公刊)を大幅に加筆修正したものである。加筆にあたっては、平成13年度～平成16年度 文部科学研究費補助金国際学術研究(基盤研究A-1)「ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」(研究代表・宮崎恒二東京外国語大学教授)の研究分担者として、サバ州における観光産業セクターで働くフィリピン人出稼ぎ労働者の聞き取り調査を行った際に、シパダン島およびマブール島を短期訪問して得た情報や資料を活用した。